

5

中国

キジル石窟 航海者窟

敦煌とバーミヤンの間の中央アジア地域で最大規模を誇る石窟群で、現在の中国新疆ウイグル自治区庫車の北西に位置しています。紀元 1000 年紀、庫車一帯はオアシス国家・亀茲国クチヤが栄え、西域における一文化圏の中心地でした。キジル石窟に残された壁画は、亀茲国で主に行われていた伝統仏教（小乗）の教義を反映しています。

航海者窟こと第 212 窟は、キジル石窟の中でも数の少ないインド・イラン第一様式の壁画を擁する貴重な石窟です。幅約3m、奥行約 11m、高さ 3.5mの長いトンネル状の石窟で、塑像など立体像が安置されていた形跡はなく、両側壁と天井に壁画が描かれていました。

壁画のハイライトは両側壁上部のフリーズ状の仏教説話図で、それぞれ航海と海の宝探しがモチーフとなっていることから、1906 年にキジル調査を行った第三次ドイツ探検隊のグリェンヴェーデルによって「航海者窟」と命名されました。ドイツ隊は同窟の壁画を切り取って持ち帰り、さらにその一部は第二次大戦中のベルリン空爆で失われてしまいました。現在、石窟内の壁画は天井の断片と両側壁の下部など全体の 3 分の 1 を残すのみです。

第 5 章では、唯一残された書籍『Alt-Kutscha (アルト・クチヤ)』の図版から復元を試みた航海者窟壁画をご覧ください。



キジル石窟